

# 統一

第一百六十九號



目次

日蓮上人の降誕に就て  
現代佛教徒に望む  
阿含と法華經  
阿含法華に對する日蓮上人の意見  
福の神となれ  
研學の態度に就て  
寄統一記者足下  
天晴會臨時會の光景  
尙風會發會式の實況等  
雜報

大僧正 本多日生  
内務次官 一木喜徳郎  
文學博士 姉崎正治  
本多日生  
坂本日桓  
井村日成  
影山謙二

日蓮上人の降誕に就て

(二月十六日妙興研究会に於ける講演)

本多日生 口述  
石川顯隆 筆記

今日は日蓮上人の御降誕になりました聖日でありまして、この妙興研究会に於ても松本幹事始め御参集の諸士が、上人の限りなき慈恩に感じ其の降誕を祝して報謝の意を表する爲め特に今日講演を御開きになつたので私も喜んで出席した次第であります、故に今日は上人の御降誕に就て聊か御話する事に致します、日蓮上人の有がたい事を研究し渴仰するに大体二つの見方があります、一は上人を人として見るのである、則ち上人は實名次郎重忠を父とし海菊女を母とし、此の兩人の間に生れた日本の人であります、然して其の人と爲りは幼少の時より凡人に優れ給ひ、智仁勇等の有らゆる美德を完全に備へ、人類の爲め國家の爲め世

界の爲めに廣遠なる教法の弘通に勤められた教界の大偉人である我等が人中の分陀利華として多大の渴仰を捧ぐべき智徳を有し給へる偉人でありまして、他面には上人を普通人類以上のもの則ち菩薩の再誕とし超人間として見るのであります、この兩面の見方は極めて大切であつて一方を除くは完全に上人を證る事は出来ません、この二面を見ずして只上人を菩薩の生れ變りとのみ考ふれば、龍の口斷頭裡の上人を見ても、佐渡雪中の寒苦に四ヶ年を送り給へる上人を考へてもそこに上人の有がたさが充分に解らないのです、之に反して人間の情意を有し給へる上人として考ふれば、上人が佛陀の本懐たる法華經を弘通して我等人類を濟度せんが爲めに殆んど堪ゆる事の出来ない大迫害を忍び玉ひし點に於ては如何にも感謝に堪へぬ眞の有がたさを感ずる事が出来るのである、故に上人を人として見る方面を忘れてはなりません、又之れと同時に上人



を菩薩の生れ變りとして見る方面を逸したならば我等は上人の絶大なる智徳神祕の靈光を味識する事が出来ないのである、上人は經驗修養を待つて後あの位置に到られたのではない其の本地身に於て確かに人類以上の神祕な点があるのであります、元來宗教は言語同斷、心行所滅と云つて其の根底は人智を超越するのでありますから、こゝまで思想の延びない人々には宗教の眞髓を味ふ事は難いのである、全体人間の智識は極めて僅かなものであります、世間の哲學者などが、宇宙問題や人生問題を解釋するに、よく圓形を畫いて其の中心に線を引きこの線以下が人智を以て解する事の出来る分部として居りますけれども、實は其の半分も解らない、半分どころではない其の百分一も千分一も解るものではありません、一寸天文學に就て考へて見ても、人智を以て解する事の出来る分部は一尺中の一分もないのである、この地球に最も近い所の火星や金星の有

様も委しく知る事は出来ません、實に宇宙の廣大なる星辰の多大なる無限と云ふより外ないのである、彼の幽玄なる智識を有して居つた、ニュートンが晩年に「己れはまた人生の海邊に落ちて居る二三の貝殻を拾ふたに過ぎぬ」と云ふ意味の事を云つて居るが實に其の通りであります、又歴史上の智識に就ても人間の知り得る点は僅か五六千年前よりの事であり、然し地質學に依れば人間がこの世界に棲息する様になつてから六萬年位経過して居ると云ひますが、假りに六萬年としても、佛教に就いてある成住壞空の説の如く限りなく回轉して居る世界の狀態に比すれば實に蒼海の一粟にも足らぬものである、又吾人人類の生理の上に就て見てもさうである、近來醫術が非常に進歩したと云ひますが猶ほ生理上の大部分は人智を以て知る事は出来ません、其の他法律でも文學でも美術でも其の大部分は到底知る事の出来ないもので、實に人智は微々た

るもので、ほんの間に合せに過ぎないものである、新様に人智の價值を過不及なく適當に認め人にして始めて宗教の眞味を解する事の出来るものであらふと思ひます、  
是より菩薩の再誕としての上人を御話し致しませう、佛陀が世の中へ御降誕遊ばされた狀態を法華經の藥草論品に説き給へるを見れば、非常な干魘で地上の一切の草木が殆んど枯死せんとして居る所へ忽ち天より油然として大雲が起り徧く一切の萬物を覆ひ沛然として大雨を下して地上の一切が皆鮮澤する事を得たりしか如しと説かれてありますが、此の佛陀の大使命を帯び人類救済の爲めに日本國に御降誕になつた上人の有様が又委しく法華經に記されてある、例へば建長五年四月廿八日始めて起に向ふて御題目を御唱へになり是より一切衆生に現當二世の大良薬を與へんと仰せられた其の通りが經文に記されてある日月の光明の能く諸の

幽冥を除くが如く、斯の人間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして、畢竟して一乘に住せしめん」との文であります、是れは神力品の文であるが其の他の經文にも上人御降誕の預言が澤山ありますから法華經全体に涉つてザット御話しやうと思ふ、御承知の如く法華經は二十八品あります、法師寶塔に事起り、涌出壽量に事顯はれ、神力顯露に事竟る、と云ふので之を起顯竟の法門と稱し最も大切なる着眼としてあります、然らばその法師品や寶塔品には如何に記されてあるかと云ふに、其の前に法華經は最も正しく傳はつて來た經典である事を一言御話しませう、此の經が世に出てた年代に就ては種々異説あれども之を反對者の側の見方に隨ふて與へて論じて佛滅后四百年若くは五百年の頃已に世に顯はれて居たのであります、其後支那へ翻譯され又日本へ渡つて來たのであるが其の中にも羅什三藏の翻譯したこの妙法華經は最も



正しひのであります。それは有名な天親菩薩が校定した梵本であつて之を須利耶摩羅が左の手に持ち右の手で羅什三藏の頂を摩て、「佛日西に入つて遺經將に東に及ばんとす、此の經典は東北に縁あり、汝慎んで傳弘せよ」と云つて授與せられ羅什三藏は誠心を籠めて漢文に譯したものであります。今日でも梵本の法華經がであります。それと對照しても確實のものと知れて居るので、マクシユミラーやケルンが梵本を英譯して居りますがそれは正法華經と同じであります。兎に角法華經の世に現はれたのを佛滅後五百年として、佛の御入滅を今より二千七百年程前とすれば（種々異説があるが）此の法華經は二千二百年前よりこの通りに記されてあつた事は明らかである、上人の御在世は六百年前であるから、この二千二百年前より六百年を引去りても一千六百年ばかりは確かである、此の一千六百年を隔たる法華經と、上人の御實行とが宛も符節を合せ

たる如く寸分違はないと云ふは實に大なる神祕とも不思議の極とも云はなければなりません、この菩薩の降誕の時は末法の時とある、末法とは佛の御入滅より計算して、一千年間を正法と云ひ、次の一千年間を像法と云ひ、是より以後を末法と云ふのであります。上人の御降誕は貞應元年の今月今日であるから、丁度佛滅后二千七百七十一年目に御生れになつたので經文に「ヤンと合つて居ます、さて元の談道に就いて申さば法師寶塔に事起ると云ふは、法師品には佛陀が此の法華經を弘むるに就て心得べき法軌を御立てになつてあります、之を三軌と云ふのである、第一に諸人に向つて此の經を説くには、如來の室に入つて説け、如來の室とは衆生の中の大慈悲心であるぞと仰せられ、第二には如來の衣を着て説け、如來の衣とは柔和忍辱の心であると仰せられ、第三には如來の座に坐して法を説け、如來の座とは一切法空

の心則ち平等不偏の心であると仰せられてあります、次に寶塔品の説相は如何になつて居るかと云へば、多寶如來が寶塔の中にありて、釋尊が法華經を御説きになるのを、「善哉善哉釋迦牟尼世尊」と御讚唱なさつたのを聞き、大衆一同が多寶如來を見奉らん事を請ひ、佛陀が多寶如來の寶塔を開きて如來を見奉らんとするには、十方世界に在つて、説法教化しつゝある我が分身を集めんければならん、然らば集めやうと仰せられて、一切の分身を御集めになり、然して寶塔を御開きになりませす。塔中では多寶如來が半坐を分ちて釋迦牟尼佛この坐に坐し給へと仰せられ、そこで釋尊は塔中へ御入り遊はされ大衆は二如來が七寶の塔中に坐し給へるを見て大に喜んで居る、其時佛が大音聲を以て發し玉ふ御言葉は、「誰れか能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん、今正しく是れ時なり、如來久しからずして當に涅槃に入るべし、佛此の妙法華經を以て、

付屬して在ること有らしめんと欲す、この告げてあります、これが虚空會に於ける最初の御言葉で此の法華經弘通の人をお求めになつたのである、誰れても此の經を弘めやうと思ふものがあるなら、こゝへ來て誓言を立てよ、法華經宣傳の權能を興へると仰せられた御言葉は然も三度まで御發しになつて居ます、之れを三箇の鳳詔と申すのであります、其上六難九易を御説きになつて如何なる事よりも、此の法華經を弘通する事の難事なるを御示しになり終りに有名な此經難持の偈を説き「若し暫くも持つ者は、我れ即ち歡喜す、諸佛も亦然なり」と仰せられてをります、次に提婆品に至つて、惡人と女人との成佛を御説きになつて居ます、女人の事も他の經々では、地獄の使ひと説いたり、外面如菩薩、内心如夜叉、と説かれたりしてあります、此の法華經に來つては立派に成佛を許してあります、又極惡非道の提婆の如きも、天王如



來の記別を受けて居ります。これは此の經が諸經に勝れて居る事を顯はし、此の經の宣傳に勤めやうと云ふ誓ひを立てさしめんが爲てあります。

こゝに於て勸持品に至つては、多くの菩薩が佛前に於て法華經の付屬を請はれたのであります。然れども佛は許すとも許さんとも仰せられない、この品の偈は末世に此經を弘むるに就て起る所の困難な事情を委しく擧げてある、これが名高い勸持品の二十行の偈であります。上人御一代の行動はこの二十行懸記を殘らず身讀なされたのである。

次に安樂行品を御説きになつて、本化の菩薩の如き弘經は到底他の者共には出来ないから是等の弱者の爲めに、四安樂行を説いて攝受の行を御勸めになつたのであります。

次が涌出品であります。この品の下の半品よりが本門と云ふのである。此の品では他方の國土より來れる

或者は祖師法華、ドンドコ法華を得意としてそれ以上に尊い本尊のある事を忘れて居る、こんな邊中が口にのみ本化本化と振り廻すのは所謂堯舜の假面をかゝつて榮耀の行爲をなすものではあるまいか、全体日蓮宗では何が信仰の對象であるか、我等は何に向つて無限の信頼を捧ぐるのであるかと問へば、大抵は答に窮するのであらう、こんな状態で本化も何もあつたのではない、實は進化の草履取にも及ばないのであります。ついでに話が横道へそげましたが、そこで佛の御石しに依り、上行等の本化の菩薩が多量の眷屬をつれて、恭しく佛前に出て佛陀に向つて親しく御挨拶がある、この時多くの菩薩は皆疑を起して我等は昔より未だ曾て斯の如き尊貴な菩薩方を見た事がないか全体誰の御弟子であり、又常に如何なる處に住し、又如何なる修行をなさつたのであらうかと云ふ事を佛にお尋したのであります。之に對して佛は、此等の菩薩の師は我である、

遍八恒沙の菩薩が頻りに滅後の弘教を乞ふて居られますが、佛陀が容易に御聽許になりません、「止善男子、不須汝等、護持此經」と仰せられて嚴しく禁止されてあります。日蓮上人が止の一字は大切なりと仰せられたはこゝてあります。佛は此等の多くの菩薩方に向つて、汝等の未だ曾て知らざる高貴の菩薩がある故それらの菩薩をこゝへ呼んで、此の經の宣傳を委ねると仰せられて、これより本化の菩薩が御出ましになるのであります。よく世間で本化進化と云ひますが、それはこゝより出て居るのである。一体本化と云ふ事は容易ならん事である。近來輕々しく本化の傳道とか、本化の正流とか云ふが、其の實所謂本化の行動を一つもなして居らん、或者は鬼子母神や、帝釋や、稻荷の如きものを以て信仰の對象として居る、或者は宗教の深遠なる意義を認めずして只徒らに現世の祈禱や、呪文やミクシの如き淫祠的の行動を盛んに鼓吹して居る。又又住處は此の娑婆世界である、又修行せし法は法華經であると云ふ事を御答へになりませぬ、ところが多くの菩薩はこれを解する事が出来ぬると云つて彌勒菩薩が次の言葉を發して居ります。「世尊此の如きの事は世の信じ難き所なり、譬へば人あつて、色美はしく髮黒くして年二十五なる、百歳の人を指して是れ我が子と言はん、其の百歳の人、亦年少を指して是れ我が父なり我等を生育せりと言はん、是の事信じ難きが如し」とこの機に疑を強めて行つた結果、次に一切經中の骨目たる壽量品を御説きになるのであります。壽量品の大切なる事は、日蓮上人が開目抄に「一切經の中に此の壽量品をさしませずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神ひのなからんが如し」と仰せられた如くでありまして、佛教が世界の各宗教に勝れて居るのは、實に此の壽量品に於て本佛の無始久遠を説き、佛界緣起を説き、宇宙法界の本主、吾人々類



の眞の救済主を御示しになつて居るからであります、若し佛教にこの教へがなければ、基督教よりも寧ろ劣る教へであらふと思ひます、苟くも佛教を信じ、特に日蓮上人の門下に屬するものは、こゝに着眼してこの本佛を信仰の對象とし無限の信頼を捧げなければならぬ、これが本化の末流であらふと思ひます、壽量品には本佛の無始常住や、無限の慈悲が如何に懇切に説かれてあるかは、諸君が既に御承知のことでもあります、自我偈に、「衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現す、而も實には滅度せず、常に此に住して法を説く」と云ひ、又一一心に佛を見奉らんと欲して、自ら身命を惜まず、時に我れ及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ、我れ時に衆生に語る、常に此に在つて滅せず」と云ひ、我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり、凡夫の顛倒せるを以て、實には在れども而も滅すと言ふ乃至毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして、無上道

事を御説きになつて居ます、この品は前の分別功德品の功德を分別した中の一つであります、次に法師功德品を説いて、弘教に従事する者の功德を擧げ、是等の人々は、父母所生の眼耳鼻等の六根が、此の經の功德に依り直ちに清淨になつて、世界萬物の有様を皆悉く知り得る力を御する事を説かれ、次に不輕品を御説きになつて、過去に法華經を弘通した、實際の人を説いて、弘教の模範を示され、次に神力品を御説きになつて、本化上行菩薩に法華經を御付屬になつて居ります、其の終りに、如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇」と説かれて、上行菩薩の再誕を預言なさつてあります、次に屬累品に至つて、他の人々に廣く御付屬になつて居ります、此等の付屬を受けた所の人々は上行菩薩の御出現までの間に合せに法華經を世間へ弘めた人々である、所謂消極的の統一論者で、例せば、龍樹天親や、天台傳教等の人々であ

に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと、説かせられてある、是等の御文を拜讀しながら、猶ほ佛陀は三千年前に入滅せられて、今現に茲には在まらぬと思ふたり、或は滅後の衆生を濟度する大任は、本化再誕の日蓮上人であるから、吾人は上人を信仰の唯一の本尊と心得べきものであると云ふ様な考を持つなら、それは大々的の誤解である、云ふまでもなく、上人は本佛と吾等との中間に在つて、常に吾等をして本佛の慈光に接觸せしめ給ふ所の、教授の善智識であると云ふ考を持たねばならぬ、

次に分別功德品を御説きになつて、多くの者が、本佛の壽命の長遠なる事を聞いて得た所の功德を分別して御示しになり、隨喜功德品に至つて、五十辰轉隨喜の功德と云つて、佛様の事を聞いて有がたいと感じ、之を他の人に傳へ、又他に傳へして第五十人に及ぶ其の人の隨喜の功德が、立派に成佛する所の種となると云ふります、この屬累品で、他方來の分身は皆元へ歸り、多寶如來の寶塔も閉ざされて、虚空會の儀式は全く終りを告げて居ます、是より四十五日を経て、佛陀は方便の滅を御示しになつたのであります、前にも云つた通り、日蓮上人は末法に入つて丁度百七十一一年目に御生れになつて居まして、只今大體を御話した、起顯竟の經文にチャンと符合して居ます、これが上人の人類以上の點で、本化上行菩薩の御再誕であること云ふ事を否定する事の出来ない證據であります、法師品に御示しになつた、衣座室の三軌の如きも、上人御一代の行勳の上には皆一々符合して居ます、上人がこの告勅を奉じて如何に如來の室たる慈悲心に富み給ひしかは云ふまでもないが、御遺文の一一を擧れば、「鳥と蟲とはなげども涙をちらず、日蓮はなかねども涙ひまなし、此の涙世間の事には非ず、但偏に法華經の故なり」と仰せられ、「日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法



蓮華經は、萬年の外未來までも流布すべし」と仰せられ、「日蓮は法華經の智解は、天台傳教には千萬分が一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲すべきたる事は、をそれをもいだしぬべし」と仰せられ、「一切衆生の一切の苦を受るは、悉く是れ日蓮一人が苦と申すべし」と仰せられてあります、又如來の衣たる、柔和忍辱の心を如何に御持ちになつたかと云へば、上人が法華經弘通の爲めに如何なる大迫害に御遇ひになつても少しも怨むる心なく、「日蓮佛勅を蒙りて」と仰せられ「法皇の宣旨背き難ければ」と云はれ「忍辱の鏡を著て」と云はれて、却つて迫害を加ふる者を不惑と思召して、「身より汗を流し、兩眼より涙を流す事雨の如し、不經菩薩を打擲せし人、現身に改悔の念を起せしだにも、猶罪消え難くして、千劫阿鼻地獄に墮す」と仰せられ、「今この日蓮は肉を裂かれ骨を碎かれ生肝を取つて引抜るゝとも、いかでか人々を恨むべきや」と仰せ

られて、少しも動し玉はざりしはこの佛勅を奉じ給ひし故であります、次には如來の座であります、如來の座とは、一切法空是なりとありまして、平等博愛の心を持つ事であります、苟くも此の法華經を説くものは、利根鈍根、等雨法雨とある如く、國王大臣に對しても、又非人乞食に向つても、平等の大見地を有たねはならぬ、丁度日月の光りが、如何なる大富長者の家庭にも亦如何なる貧者弱者の屋上にも、平等に輝く如く、一視同仁の見に住して、現當二世の利益を蒙らすべきものである、これが宗教の最も尊い點であります、然るに世の中の人々を見ると實に甚しき差別の心を持つて居る、一寸電車に乗つてもすぐ解る、車掌が立派な服装の乗客を見ると、切符を賣るにも寔に丁寧であるが、服装でも少し悪いと非常な様服である、獨り車掌のみでない、堂々たる政治家でも、宗教家でも、教育者でも皆さうである、佛陀はこの事を深く戒めて、如來の

座に座せと仰せられたのである、上人は至誠に此の旨を奉じて、惡人とか女人とか敵とか味方とか云ふ差別の心を離れて、最も懇切に教化なさつたのであります、我々上人の流れに浴する所の僧俗は、上の三軌の如きをよく心得て、活ける人心の中へ、宗教の靈力を與へる事を怠つてはならん、今日の人々は僧俗共に只本堂の修繕とか、庫裡の増築とか、佛像の衣更へとか云ふ事のみに関心を用ひてさわざはつて居る、そんな事はどうてもよい、そんなところに、宗教の生命があると、思つて居るなら、日蓮宗も何もあつたものではない、どうしても生ける人心の中へ本化の信仰を扶植する事を勉めんければならぬ、これが苟くも上人の流を汲む者の責任であらふと思ふ、

又、上人が「勤持品二十行の偈は日蓮だにも此の國に生れずば殆んど世尊は大妄語の人、乃至經に云、有諸無智人、惡口罵詈等、加刀杖瓦石等云、今の世を見

るに日蓮より外の諸僧俗の人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ刀杖等を加へらるる者ある日蓮なくば此の一偈の未來記は妄語となりぬべし、乃至數々見抜出等云、日蓮法華經の故に度々流されずは數々の二字いかにせん」と仰せられて、一字一句の相違なく身讀なされたのであります、

又「日蓮は過去の不經の如く當世の人々は彼の輕毀の四衆の如し、人は替れど因は是れ一なり」と仰せられて不輕品の佛記にチャンと符合して居るのであります、

是れらの經文の明鏡に對して考ふればどうしても人間凡夫の衆てはありません、本化上行菩薩の御再誕たる事を否認する事は出來ぬのである、實に靈山の稟承に赤爾計りの相違もなき色も替らぬ上人の御弘通であります、現今の門下は大反省を要する事であります、我等は益々奮起して、後五百歳、廣宣流布の佛勅を實現せんければならん、私の師匠が嘗て「妙法廣布堅三法基



六百ノ星霜日向淺」と云ふ句を作つた事があるが、上人の御在世より今日までの年數や、現今有して居る寺院の數の如きはまた雲の口である、上人の大主義を標榜して、人類社會を救済するはこれからでありませす、日は東より出て西に向ふ、日本の佛法の西に往く瑞相である、佛法の眞の光りを我國より世界萬國へ發揮させねばならぬと思ひます、

以上經文に合せて御話した點は、「眼前の證據あらんずる人の此の經を説かば信ずる人もあるべし」と仰せられた如く、上人が身を以て法華經の預言を證し給ひし超人的の點で、科學的研究では了解することの出来ない尊いことでありませす、故に上人を見奉るには、人として見るのと、人以上として見るのとの兩面は決して偏計することは出来ませせん、全体法華經の貴い法門や、日蓮上人の正しき主義を聞くのは容易な事ではなから、世間で説法者などが話して居る様な事は、上人の

主義でも、法華經の眞理でも何でもなく、皆出來そくないの法門であります、私共及ばすなから、派別の考も何も捨て、法華經の眞實や、上人の大理想を其儘弘めて居るのでありますからこの點は充分汲んで御聞取の上、正しひ信仰に入り、無始常住の本佛の御手より、世間の樂、及び涅槃の樂を御受けなされる様なさるのが何よりも肝要であります、(完)

左の一編は一木内務次官が社會改善に關し、佛教家に囑語せられたる、意見を中外日報によりて公表したるものなるが、我徒社會問題に注意と活動を期する上に、參考の資にもならんか、思惟し此に掲載することにせり、

### 現代佛教者に望む

内務次官 一木喜徳郎

佛教に限らず總ての宗教が發展しやうとするには、其從來如何にして發達を來したるやといふことを考察し、即ち古を尋ね新しきを知るといふ筆法でやるが好からうと思ふ。余は先日仙臺地方に出張した時に、二三感じたことがある、舊仙臺藩主伊達正宗が非常に植林

事業に熱心であつたといふことは豫て聞いてゐたことであつたが、今度實地に其遺業を見て一しほ深く感心したのである。正宗は戰國時代の英雄であつて、時を得ば天下の權を掌握しやうといふ勢があり、其赫赫たる武功に就ては能く世人に知られて居るけれども、民政の事に意を用ひ、殖林事業等に熱心であつたといふことは餘り多く知られて居らぬ。が正宗が如何にして殖林事業に志したるかといふと、正宗が藩内の或る處に行つた時に、一人の坊さんが頻りに杉の實を撒いて居たから、それは何にするのかと尋ねると、坊さんは曰く斯うして杉の實を撒いて置くと、之が他日生長した晩には非常に利益を與ゆるものであるが、今此藩の藩公でも抽借の爲す通りに行つたらば、將來此藩は非常に富んだ國となり人民も亦た大なる利便を得るに相違ない。抽借は何時か藩公に逢つて此事を語らうと考へて居ると、之を聞いた正宗は深く感ずる所があつて、それから紀州熊野邊から杉の實を取寄せて播種し斯くして殖林事業に熱心なるに至つたのである。之は其僧侶の一言が原因を爲したもので、元來昔の僧侶は、歴史を見ても明かに分るが總て教法の宣布に熱心なると同時に一方には國家の爲め人民の爲めに種々公

共の事業に奮盡して來たことは今例を擧ぐる迄もないことである。是は詰り宗教者は素より人の精神を救済するといふのが主であるけれども、又た他方には人の肉を救ふといふことが必要で、昔の僧侶は此の主たる精神的救済に盡して來たから、僧侶も社會より尊敬され佛敎も隆盛を來したのである其社會的事業といふやうなことも、救済上の原則で人々が利益を欲することから起つて來るものには、僧侶は關係せなくても宜いが、自分には何等の利益無くして一般の民衆に利益を與ゆるといふ事柄には大に努むることにして、然かも之は宗教を宣布する方便としてではなく、則ち慈悲心の發動よりして、人の精神を救済指導するのみでなく、其肉體をも救ひ世の爲め人の爲めに奮盡することになれば、確かに其發展を見るであらうと思ふ之が古來我國に佛教が盛んになつた原因で、昔の僧侶は皆此の考へを持つて世道人心の爲めに盡して來たのである、故に今後は徒らに未來をのみ説かんよりも、現在を離れぬこととし、常に世の中より一步進むといふことに着眼して、殊に社會の調和を扶けて行くことに大に努めなければならないと思ふ。それには慈悲心の働きの一つは知識が必要である。昔は學問する者は僧侶のみで、日本の



文明に貢献した佛教の功績は、僧侶の力にあることは實に多大のものがあつたが之は其時代の僧侶の知識が常に一步社會の上にあつた爲めに能く啓發指導することが出来たのである。そこで現代の佛教者も社會以上の知識を涵養して始終社會の上に立ち社會に先んじて事を爲すといふことにしたいものである。

も一つ佛教の事に就て感じたことは、同じく仙臺行の流車中に、偶然にして二人の坊さんと乗り合せた。二人共余と近く腰掛けてゐたから其談話が能く聞こゆるので、余は之を聞くとともになしに聞いて居ると、一人の坊さんは、『佛教を弘むるには何うしても殿堂伽藍を壯大にせなくてはならぬ』と語つてゐた。が斯ういふ考へても甚だいけぬと思ふ。總て宗教は信仰が根本となるもので、堂宇伽藍の如きは抑も末である。然るに其内を顧ずして徒らに殿堂の大、伽藍の美をのみ欲し然も之を以て宗教宣布の根本なるかの如く考へて居るのは、どうも間違つたことだと思ふ。東本願寺法主の俳句に『勿体なや祖師も紙子で九十年』といふ句があるのを見たが、その祖師が九十年の長い間常に紙子を着て専心布教傳道に努められた其精神こそ、實に熱烈なる信仰に基くもので、僧侶は之を最も第一として殿堂

の如き形は後で宜いのである。今度の詔勅に『華を去り實に就く』と御仰せありしは洵に此の事にて結果よりも其實、形よりも其根本を重んじ之を先とせなければならぬ。今、殿堂を壯大にして伽藍を美麗にせんと欲する如きことは、其根本の精神を忘却したるもので佛教の爲めに甚だ遺憾と言はざるを得ない。そこで現代の佛教者は、『紙子で九十年』といふ精神を以て、又た『華を去り實に就く』といふ考にて、誠心誠意を以て飽迄世道人心の爲めに奮盡せられんことを希望するのである。(未完)

左の一文は去月十三日天晴會第 例會に於ける姉崎博士の講演にして當時列に演説なかりしも假りに題名を附して茲に撰ぐ文實記者にあり

## 阿含と法華經

文學博士 姉崎 正治

本日の期定の講演者は三宅博士であつたのですが、何か差支があつて出られぬと云ふので、兩三日前に本多君からは是非今日の講演を頼むとの事でありました、私に取つては飛入り同様な譯で、充分の準備はありませ

んけれども、粗末ながら先回のつながりを御話いたし  
ます、

先づ「如來」といふ語の意義と此の語が佛教國に對して如何なる影響感化を及ぼしたかといふことを御話しいたしなすと「如來」といふ語は經文の中に澤山ある語でありまして、其語の成行を見ますに、阿含經などに顯はれた所では、初めは現實の佛陀即ち印度史に現はれた釋迦其人であつたのですが、大乘經に至りますと、如々の法性より出て、師主佛陀と成つたと云ふ様に更に深く推理的になつたのであります、即ち始は單に人間より出て段々と佛性を開發して遂に成道して佛陀に成つたといふのが、更に其の先を詮索して満足なる解釋を求むるに至つたのです、「如」は「如是」は來るてなく行くと云ふ意であつたので、大體の意味は「是の如くにして彼岸に到達せる人」といふ事である、それて亦此の如是に就て、第一は是の如く實相に隨つと

云ふ意と、第二は諸々の如く即ち過去の諸佛の如く修行しての意とを含んで居る、過去の諸の如來の如く修行して得た道とは、即ち是れ過去の諸佛が履んだ道といふことで、亦更に之を推し廣げれば過去の佛の如く未來の佛も亦然りと云ふ様になつた、是等は大乘法華經などに顯はれて居る思想であります、然し此點は阿含あたりでは、實相といふ事でも過去の佛といふ事でも明瞭には推定がない、過去佛といふ事が例の印度思想の梵天といふに歸する邊もありません、如上の原始的意味の信仰が完全に歸徒中に推定せらるゝに至り、「如實の道に乗して來つて正覺を成する」となつた、如實とは眞理に契つて居るの意で、即ち過去にも未來にもいつても變らぬ眞理がある此眞理に乗じて來りしが故に如來と稱すと云ふのです、夫れて是れは三世の諸佛皆自然なり同一だといふに結歸するので、此の三世諸佛といふ語は之を換言すれば三世の一



一切衆生とならねばならぬ、即ち三世諸佛とは是れは元一衆生が諸佛になつたので亦一切衆生は必ず成道し得るに相違ないからであります。

原始佛教では「如來」の稱號を廣く用ひて居る、佛陀自ら如來と稱して居る處も多いが、弟子等は直接佛陀に對し如來とは呼んで居ない、弟子達は常に「世尊と申して居ります、又年少の比丘などは外道に對する場合に非常な威嚴を以て佛陀を如來と稱して居る、此の如來の稱號が又廣く用ひられて居て決して一人の佛陀にのみ定まらない、其の上には如來の語には一切衆生を包括し又包括せんとしつゝあるのです、是れは如來とは一切衆生が成道したる時の稱であるからです、佛陀の如き如何にして如來に到達したかと云ふに法華經方便品あたりでは——私は本文で見て居るので譯書の文句は覺えて居ませんが——伽耶の城を出て、遂に先佛の道を修行して成道したといふのです、阿含の阿羅漢果

二乗を排斥することは佛徒中にて二乗に安する弊あるが故に此病に對しては救治が必要であるから排撃も必要だが、現在の法華教徒の中に於ても安りに二乗を賤んで我は如來なりなど云はゞ其た非である、佛の一乗なるものは一切を包含したもので決して偏弊なものではない此點に於て阿含と法華は一に歸せねばならぬ同じ一乘に趣かねばならぬ

次に如何にして吾人は如來となるべきかといふに、吾人は戒定慧の三學に依つてある更に其根本を云へば吾人が如來になれるのは吾人と佛と一体不二なるが故である、從來何にも無つた者が如來になるのではなくして本有の如來性あるに依るからである此邊に至ると阿含では明了でない是を詎く解決したものは法華經の壽量品であります、若し元無の者が佛になると云ふならば師主佛陀は三千年前に如實に修行して如來と成つたことになり譬ひば躰化人の王の如くに風來的に仕上り

といふことでも凡夫が修行して成道したる位置で、即ち如來の意で、此點より云ひば、如來と阿羅漢果とは區別する必要がない、阿羅漢果は大した覺りて到底我々などの及ばざる處である、日本の大乘佛教徒が此の阿羅漢果をつまらぬ者の様に云ふて阿羅漢を求むる二乗を貶斥し排撃するは非常な誤りでありませぬ、如來とは佛陀の稱號であり覺者の稱號であると共に一切衆生の修行成道の理想である、所が此の理想が、彼の錫命あたりでは昇天といふ事になつて了んだ——如來になるが理想でなしに——日本あたりでも中古斯る思想があつた様です、十善の徳に依つて昇天すると云ふ信仰であるが、昇天者は何故に昇天すべきか自身には明了になつて居ない、現在のセイロンの佛徒でも昇天の爲めに禪定は修行しないで戒惠のみを修行して居る、夫れで私は何故に禪定を修せざるか、又何故に昇天を希望するかと云ふことを尋ねたが明了でない譯が分らない

本因なくして偶然に成道したことになる、そうするに如來成道の本源が解釋が出来ない、されば元來本因ありしに依つて佛に成つたとならねばならぬ去りとして佛の前に先佛があり其先きにも佛があつたと云ふ様に數を多く列らべたのみではいかぬ、どうしても久遠實成と云ふを顯はして茲に到達せねばならぬ之を壽量品に關明して無量劫よりの成道なることを説いたのである、吾人も亦如來性を以て久遠劫よりの愛子として此の世に生れ出で、居るのであるから、將來如來となることが出来たものである、即ち法界一乘成道の理顯はれ生佛不二の本源に達するならば吾人も亦如來となるのである

餘り御話しが抽象的になり且つは脈絡もハッキリしなかつたかも知れませんが、初めにも申す通り飛入りますから此の邊で御免を蒙ります。



本講演は前掲佛博士の講話に引續いて本多師が日蓮上人の意見を述べられたるものは亦別に標題を掲げたるに非ずるも便宜上茲に題名を附せり文責記者にあり

## 阿含法華に對する日蓮

### 上人の意見

大僧正 本多 日生

唯今佛崎博士の有益なる講話を拜聴しまして、大に發明する所も御座いました次第であります、本日のみならず屢々佛崎博士から御聴きする所であるが、其れは日蓮上人の佛敎に對する見解に就ては其卓見に駁する點が少くないが、どうも大乘小乗の區別を非常に悪く云ふ居らば二乗排斥を強く主張せらるゝのは或服し出來ない此點は大に日蓮上人から割引をして貰はねならぬとの御意見であります

自分は博士の御意見などに由りまして日蓮上人の遺文を拜するに當りまして、大に此邊に注目するに至つた譯で偏に感謝せなければならぬが、然し日蓮上人が何んでも構はず無暗に大小權實の區別を劇しく主張したり諸宗を排撃すると云ふ様に、古來から言ふて居るものが有るのは、是れは上人に對する一種の元品の

無明とも稱すべきで、上人の眞意を解せざるより出たる全然誤解であります、日蓮上人の敎義に基く處は無論法華經でありますからして、上人の眞意を解するには先づ法華經の敎旨を味讀する必要がある、

法華經は大小乘に懸隔を立てたのでは無くして、法華の開會或は開顯主義と稱して融合統一に重きを置いた方である、亦二乗に對しても排斥を主としたものではない二乗を殺すのでは無く寧ろ之を活かさんとして居るのである方便品に三乗を並べ擧げ譬喩品に三車大車を並べ擧げたるも其の眞意は一佛乘の大道に歸入せしむるの主義で排斥を主としたものでない、信解品に長者と窮子とを説いたのも長者を佛に譬へ窮子を二乗に譬へてあつて、窮子たる乞食が長者の家督を相續することに成つて居る、初めより窮子をば長者の子供が迷ひ出したものと見てある、夫れですから我は長者の子にたるもの、是れ實に法華經に二乗を讀して「眞ノ聲聞眞ノ羅漢」の語ある所以であります、

又佛の説かれたる敎へに就ても、法華經の中には斯う云ふである「若し是ノ深經ヲ聞イテ聲聞ノ法ヲ決了スレバ是レ諸經ノ王ナリ」(聖語録一一六)、是れは法華開ノ方等般若ヲ連ベサルナリ」とある、此の意味は法華の三乗即一乘の開會と云ふものは、藏闍相對として阿含三藏と法華開會と直接に相對して、小乘即大乘、阿含即法華と開顯するが特色であるから中間の方等般若經なや此處には論じないと云ふのです、

以上御話した所に依て法華開顯の意義並に此の法華經が二乗排斥でなく開導復活の主義であることが解ると思ふ、

天台大師は、大小乗の敎理を説明する中に、苦集滅道の四諦に就て、生滅無生無量無作の四種の四諦を明して居る、小乗敎は生滅の四諦を明すと云ふのですが此の小乗の敎へを少し進めれば、同じ四諦でも大乘と成る、そうして大乘の無生無量無作の四諦でも根本原理は小乗の四諦と異ならぬと云ふのです、

法華經の中には阿含即法華、三乗即一乘の意を示さん爲めに、此四諦の法を法華の法と對説してある即ち「昔シ波羅奈ニ於テ四諦ノ法ヲ轉シ、分別シテ諸法五乘ノ生滅ヲ説キ、今復最妙無上ノ大法ヲ轉ジタマフ、是ノ法ハ甚深奧ニシテ能ク信スル者有ルト少シ(譬喩品)」とありまして、之を天台が法華文句に註釋を加へて居る語に「法華ノ開顯ハ藏闍相對スルガ故ニ中間

日蓮上人は斯る法華經の敎義を根底として起つたのであるから、安りに二乗小乗等を排撃したるものではない、實に大なる包容統括の主義を抱いて居らるゝのであります、然し一面に大小權實の區別等を決別絶叫せられたことに就いては亦大に深意の存することであり、そこから慎重なる考察を遂げて頂かなければならぬ、日蓮上人の語に「大智慧ノ者ナラデハ日蓮ガ弘通ノ本意ヲ得難シ」とありますが大いに味ふ可き語と思ひます、

宗教の問題には純理的方面と系統的方面とあることを觀取せなければならぬ、即純理的に敎理の本質を論ずる場合には大乘小乗權實などいふ事は少しも價値なきものであるけれども、若し之を系統的に見て各宗分立し大小權實相對峙して居る時に、其系統を正し其形態



の統一を仕上げる場合には、大に教相上ノ勝劣淺深を論ずる必要がある、日蓮上人の主張にも此の二面の主張があるのであります、

日蓮上人の純理的方面の主張を見るならば、大小權實の區別どころか、自己の依經たる法華經すらも眼中に無い、故に『餘經モ法華經モ詮ナシ』と喝破した位である、されば彼の片海の圓智坊が、日々法華經に對して一字三禮の修行をやつたのを未だ法華の真意を得ざるものと爲し愚劣なる經典崇拜を叱責せられた、或は亦『現在ノ花嚴經乃至述門十四品涅槃經等ノ一代五千餘年ノ諸經ナ方三世諸佛微塵ノ經經ハ皆壽量品ノ序分也』と本尊鈔に書いてあつて、如何なる經々も皆是れ壽量品の序分なりと云ふのであるが、又此の壽量品でも其文相には執着しないで『壽量品ノ文ノ底ニ秘シテシツメタリ』とて文底の深義を咀嚼すべきを訓誡された、這間の日蓮上人の見識を深く觀なければならぬ、

けれども系統的に佛教の系統を糾明し、佛教各宗各派分立對峙せる形態に對して、綜合統一を絶叫する場合には、大小顯密聖淨等の教判に對して斷定を下さねばならぬ、此の場合には大に大小乗の區別、權實の剖判

して排撃した、西洋哲學の狀態を見るに混同主義、折衷主義批判的折衷主義と云ふ様に發達して居るが、我佛敎界を見るに此の混同、折衷の二つを出ない、日蓮上人は佛敎上に於て散漫なる理平等や抽象論を排し、實に此の批判的折衷主義を唱道したのである、單に混同的に阿含法華が同一であると云ふ様なことを主張するならば佛敎教理史の墮落であり退歩である、それですから、佛陀論、本尊論等の標準を立つて而して佛敎の系統を明にせよと云ふのはそれが爲めに教相も八ヶ間敷言も諸宗の折伏も有る所以なので、之を上人が寛容抱括の主義に乏しかつたが如く思ふは皮想の見に過ぎない、

されば、阿含と法華との關係に就いても單に小乗として賤み排斥したものでない寧ろ一方には大なること海の如き包容統合の主義を示して居る、それは上人が因果鈔に

爾前ノ經即法華經ナリ、法華經即爾前ノ經ナリ、法華經ハ爾前ノ經ヲ離レズ、是ヲ妙法ト云フ、此ノ覺リ起ツテ後ハ、行者阿含小乘經ヲ讀ムモ、即チ一切ノ大乘經ヲ讀シ法華經ヲ讀ム人ナラ、故ニ法華經ニ云ク聲聞ノ法ヲ決了スレバ是レ諸經ノ

等を明にすべき教相を論斷する必要がある、此の場合には諸宗の非違を呵責し大乘を以て小乗の弱點をも摘破せんければならぬ、則ち教相上の論決が非常に必要なのである、又最も解り易いのは教相であつて、抽象的の理を争ふのは天を仰いで虚空を譯ふが如きもので殆んど區別を定むるに困まるものである、故に經を離れては其當否を辨じ難い、上人が開目鈔に須彌芥子の如く明かなる教相に猶ほ或ふ況や虚空の如くなる理に惑はざるべしやと言はれたも尤もな次第で、純理的方面も大に主張するけれども、亦積極的に教相を判明して四個の格言をも唱道するに至り以て吾人信仰の目的をも統一せんとしたので、此處に至ては散漫茫漠たる抽象論をば排斥したのである、故に十章抄には『日本國ノ謗法ハ爾前ノ圓ト法華ノ圓ト一ト云フ義ノ盛ナルヨリ起ル』とて所謂圓體同と云ふて徒らに教相を忘れたる理平等論を排して即ち日本佛敎界の惑源は此圓體同にあると云ふて之を痛撃せられたのである、

上人の開目鈔を見ると、劈頭に儒道、外道、佛道の三道統一を叫んだ位であるから、上人の真意は闊大なる統合歸一の主義であるけれども、亦一面に争ふたのは分烈的に宗派を立つるは佛敎の大統を没却せるものと

王ナリト阿含經即法華經ト云フ文ナリ(聖語錄一 二五)

と書いてあるのを見ても解る、即ち是れに依て上人の考察中には純理的に大小乗を開顯し來りて阿含法華同一の主義が存在しつゝあつたことは明なることと思ひます、

嘗つて日蓮上人在世の時代に日蓮は佛敎の純理的方面を逸して徒らに他宗を批判する機に非難した者あるに對して『先づ日蓮ガ是レ程ノ事ヲシラヌト思ヘルハカナシ(聖語錄六四一)』と其淺見を笑はれたことがありますが、實に上人の佛敎觀は圓滿なるものであります、唯各宗が無批判の混同折衷であるから、是に對しては此の病を對治する必要よりして痛烈なる幾多の批判論斷を下された譯であります、また上人の事に就いては此の外多々の辨明すべき點があると思ひますが、追々機を見て申上げたい考であります、



此の法は一月一日供が老上人の養へ無禮に出でし時の法にして  
孤り聞き流しにするも、いとおしく思ひ統一に寄籍することになし  
ぬ

## 福の神になれ

大僧正 坂本日垣 述

善業無外 筆記

善業無外  
昔よりも貧は諸道の妨げじやと申されてあるが、然てある世間の事でも出世間の事でも貧乏神の手際は極めて瑣細な事業でもなしうる事は出来ない貧乏てはすべて駄目だ、舊徳川時代の儒者先生が貧乏を自慢して貧乏は我道の常じや杯といふて程氣味飛して富貴の儒者を見ては誇り嘲りしが瘠我慢も程かある富と貴は人の欲する所貧と賤とは人の惡む所て人情に違逆したる瘠我慢は世間普通の事ではないか唯が貧乏を嗜く者がある往昔僧侶も貧道某杯と書た筆て見たが氣障な書方である佛道の實財の貧乏は嫌じや、仍て出世間の事業を發さんと有爲の志ある人は必ず福の神に成なねばならぬその福の神になるには如何したならば成られると考へて見れば實に容易事て有る、世間の福の神となるも、出世間の福の神となるも別に秘傳秘事は決してな

ふと自分の身替の進退を自分でするのじや、是れ程無造作な容易仕業はない、それが出来ないといふは能々勝がない片輪人間では有るまいか、内に在て親に孝行するならば貧乏神て孝行するよりも福の神て孝行をした方が氣兼ね苦勞がなくて好てはないか、貧乏神て孝行を仕様とする可愛子を生き埋めにして泣き悲み天神地祇の御厄介を蒙り黄金の釜でも拜領せねばならぬ、其れよりも他の厄介にもならぬ福の神と成て舜の如く四海の珍膳珍味を以て養ひ孝行した方が氣がね苦勞がなくて好いては有るまいか、先は内は斯ふ云ふ譯にして外は社會大小百般の貧民救濟事業を興すにも毫も他力を借らす自力にて成し得る程の福の神と成るが好い、それにしては覺れて止むの稼をせよ、稼に貧乏退ひ附かずて福の神となるには極めて容易のて有る、所詮人界の思ひ出は是れ斗りて好いと云ふのては決してない此の上はまた一段立越た出世間の福の神とならねば三世常住の眞實の福の神とは言れない世間の福の神の救濟事業杯は一代ばつとも燃えた火の消へた様な者だ、これで飽き足る譯ではないから一段立越へた出世間の福の神に成らねばならぬ此の世出間の福の神にも種々雑多の福の神が有る摩訶迦羅大黒天の如き七珍袋を

い唯た、稼の一字を守るに有る、此の一字を堅く守り行へば如何なる貧乏神も忽ち變化して福の神となる極めて手軽に極めて容易て有る、譯にも稼に貧乏追ひ付かずと云ふて何の職業に關らず稼出したる福の神の足の達者には實に驚く、其の早き事は疾風も電信も比類すへきてない、設令貧乏神が命限り魂限り一生懸命の速力を出して追ひ付んと競争しても泰山を狹て北海を超えるの類て實に駄目だ、仍て稼の一字にて正と不正がある貧の盗み杯と云ふ盗賊稼は眞平譯免じや、都て不正不義の稼は排斥して正道正義の稼に心を盡し身に勤むれば忽に福の神に成れる古今歴史上に載せ、救ひされない程ある必竟考へると吾か身の貧乏神吾か身の福の神て側より持込れたる者ではない吾か稼の身か福の神と化し吾か不稼の身か貧乏神と化して己か身の貧乏神の鬼が責め惱し己か身の福の神の大黒か己を樂しませるのである諺に心一つが鬼にも蛇にもまだは神にも佛にもと心無き里の童の唄ふを聞て感伏した實に善美を盡したる雅樂の頌歌とも謂つべき奇特殊勝の妙歌である、此の里諺の通りじや然れば貧乏神と成つても天をも咎めず人をも憾ずじや、又福の神と成ても天にも頼わす人をも依頼ずじや、然れば鬼にならふと佛になら

肩に擔ひ打出の小槌を手に持て叩き廻つて歩行さ一己一人位宛救濟する小事業を營む出世大黒の福の神と成つたのては駄目だ、駄目だ同じ出世の福の神と成るならば無量恒河沙の福の神を眷屬としてその棟梁たる福の神に成らねばならぬ、此福の神は天を尊ても地を探してもない天上天下唯我獨尊の福の神て有る東方にも西方にも十方に福の神は澤山有るけれども皆一機一縁の貧民を救濟する小事業を營む小福の神だから駄目だ十方未曾有法界第一の大福の神たる釋迦法皇と成て横に十方の貧乏人を救ひ堅に世々萬々生死の苦界に陥りたる窮民並に誘佛誘法の饑寒孤獨の惡輩を化度し救ふ大事業を經營する大福の神と成らねば福の神と成た甲妻がないぞ、我等如きの生死流轉の貧乏神が何うして釋尊の如きの大福の神と成れる者か、否否然ふてない成れる釋尊が如我等無異と仰せ有て予が金言に順へは我が如く等しく異なることなき大福の神の釋迦法皇と成れると教へた釋尊の金言に順した人々が眼前、如我等無異の大福の神と成た證據が有る後に断してさかせる、此の大福の神の釋尊は百億の日月百億の須彌百億の四州此の娑婆三千大千世界を領して此の領土を生死流轉の貧民救濟事業の立場とした所謂今此三界皆是我



有て、法皇の領土に有る其中衆生悉是吾子て、皆な法皇の御子て有る、唯我一人能爲救護て、生死の患難を救ふ道を教へた御師匠に有る、此の通りの三徳全備の大福の神の法皇に有る、此の釋迦法皇の領土に對する貧民救濟事業を斷して聽せるが、此の世界にも遊惰者の生死流轉の貧乏人か無量恒河沙に有る、其中に法皇の持て餘し者が一千二百人と一萬二千人有つた此の持て餘し者を救濟するに四十餘年と云ふ長き年月を經過した經に書き記して有る聲が千二百の大阿羅漢萬二千の聲聞どもて、其姓名は舍利弗目連迦葉迦旃延等の貧民に有る、此の貧民ともは其昔は三五下種の心田を所持したる堂々たる無双の豪族富農に有つた、誰にも有る事だが落着主義を始めた慎しなればならぬ、此の放蕩者の内にも種々の道樂があつて、五欲の樂みに身を害ひ三五下種の心田を質地に賣りて六道生死の巷に呻吟ひ乞食したるも有り、或は五利使の遊廓に通ひ傾城の爲に身を擾したるも有り或は五節使の妓樓に登り藝妓に心を蕩れたるも有り、或は十思の遊艇に乗して流連し身を亡したるも有り、或は塵沙の野に出て獸を追ふて家を忘れて荒亡し、遂に無明の闇國に漂泊して、大事に所持したる三五下種の心田を質地に賣棄して、

六道生死の窟巷に呻吟ひ見る甲斐もなき貧乏神と成て苦に苦を重ね、憂に沈み、悲に咽ひ、菩薩の福の神には、永不成佛の貧乏神と嫌はれ、何れへ行きても取り付く島もなく、側て見る眼も氣の毒千萬であつた、爰に於て、能爲救護の大福の神、慈悲深重の釋尊、見るに堪へがたくいざ彼の生死流轉の貧民を救濟し、常住不滅の樂を與へんと、一の方便を巡らし、密に二人の形色憔悴たる威徳無き田夫野人を彼か所へ遣はし、鬪に漂彼の民と同情させ、陰に我が家に連來らんと謀つた、内秘菩薩行、外現是聲聞の謀に陥りて連れて來た、仍て大福の神の長者も、遂事は咎ても詮ない事じや、叱るも時に依る、爰ては誘引して稼ぎ働せて質地に賣たる下種の心田を受け返す資本を拵へさせるより外に手段なしとて、豚田舎の鹿野苑と云ふ所へ住居をさせた、仍て小乘三藏と云ふ野を開墾させて、見思の糞を日々は除ひ下種の心田に十分肥料を加へ耕さしめた、又或る時は方等の野に連れ來つて、小乘三藏の開墾の鹿田に生へたる、空執の莠を耘り除かしめ、又或る時は般若川の智水を汲み取らしめて、年久しく穢れ染みだ、空執の垢を、淘汰させた、此の通り四十餘年間の永き月日に、大塚大働をさせた、下種の心田を受返す

資本も十分貯た、然うは刈り取りをせんと、靈山會の法華の道場に於て、法説の早稻田を耕した、貧民か舍利弗に有つた、此の法説の早稻田へ、一念三千の鎌を以て刈り揚て見た所が、最極上等の、華光如來と云ふ佛果の良穀を獲得した、其次に譬説の中稻を耕した貧民か目連迦葉等て有つた、三車大車の鎌を以て刈り上て見た、同じく最極上等の、多摩羅跋香如來名相如來光明如來金光如來等といふ佛果の良穀を獲得した、最後の同縁説の晚稻田を耕した貧民が五百七百の下根の輩であつた、宿世同縁の鎌を以て刈り揚て見た、同く最極上等の普明如來一切衆生喜見如來等と云ふ佛果の良穀を収獲した、其他正見の人も邪見の人も利根の輩も鈍根の輩も善人も惡人も男子も女子尼も僧も、昔下種の人々は一人も餘さず漏さず悉皆佛果の良穀を收穫して九界生死の貧乏の身を脱し佛界常住の大福の神と化し所居の國は穢土を轉して淨土となした、各々種生神通生願生業生の四種の眷屬を従ひ、無量恒河沙の所化を領して、未曾暫廢の教化を施し、自愛法樂には四徳波羅密の樂をなして大福の神となりたるは、智慧第一と賞られたる舍利弗の智慧でも、神通第一と稱せられたる目連の神通でも、何ても彼ても駄目だ、釋迦法皇の

龍顏を拜し奉り我が身も法皇の御子と成て、授職灌頂の大禮を行ひ、舍利弗目連の蹟を繼には以信得入の門より入らねば、法皇の天顏を拜し奉り我が身法皇の御子となることは出來ない、以信得入の門より入り法皇の龍顏を拜し奉り、我が身法皇の御子となるには何うしたら成れる、感應道交を祈るが宜しい、感應道交とは何んな者だ何う祈るのじや、それは我等が強盛の妙法信念の感水と、法皇の佛所護念の應月と道交なるのじや、我が妙法信念の感水が昇るのでもなく、法皇の佛所護念の應月は降るのでもない、信念の感水と、護念の應月と前後なく道交になる、是れを一念三千の妙法と申すて有る、然れば我が妙法信念の感水に、釋尊の佛所護念の妙法の應月を宿すには、信念口唱と云ふ強盛の縁が肝心て有る、信念口唱の縁には九界生死の貧乏神も追ひ付く事は決して出來ない、佛界常住の大福の神に容易く成られず、然すれば世間の福の神に成るにも縁に貧乏追ひ付かず、出世間の大福の神に成るにも縁に貧乏追ひ付かず、皆々縁の一字を守つて福の神となれ南無妙法蓮華經、是れは一往還門の福の神の法話じや之れて我等人界の思出が叶ふたと云ふのではない、今一般立超たる本門常住の大福の神とならぬ



は、深自慶幸獲大善利とは申されない、元且から餘り  
 新しが長かつた本門常住の大福の神の法談は永春のと  
 きに譲ることにしませう

左は二月三日大學林同窓會に於ける演説にして其  
 内容單に吾人學生のみに止らず信徒諸氏及び僧  
 侶間にもかゝる誤解を懐ける者少からざるへけれ  
 ば特に掲ぐる事となしぬ

### 研學の態度に就て

井村日成 講演

吉田堅晴 筆記

私は「研學の態度に就て」と云ふ題で二三の注意すべき  
 事柄を御断し致さうと思ふのであります、最早大分時  
 刻が遅くなりましたから、成るべく簡單に述べらるる事に  
 致しませう、先づ初めに

(一)宗派に囚はるる勿れ

と云ふ事て吾々は宗派に囚はれ人と爲つてはいかぬと  
 云ふ事を話して致します、一宗一派と云ふ觀念の捕虜  
 と爲つては宗學研究上決して正當なる道程に進むこと  
 が出來ぬのであります、一体我々が信ずる法華宗は秀

句十勝章に申されてある通り佛立宗と云ふて、釋尊自

から御定めになつた宗旨であつて、決して後代の論師  
 人師の立てた宗旨ではない、依て我宗旨は釋尊一代の  
 教法を總括して之を批判し之を統一して其宗旨の歸着  
 を示されてある宗旨である、一宗一派と云ふ様な分裂  
 的の偏頗な考を以て、此宗旨を研究しては此宗旨の眞  
 髓は到底了解することは出來ぬのであります、ところが  
 が此宗旨を奉して居る現門下の状態は何うであるかと  
 申しますと、此は亦自ら信ずる教義とは正反對に非常  
 に偏狹な思想を以つて居つて、統一的思想杯は爪の垢  
 程もない様である、此等の分裂的見解を取りて種々の  
 宗派を形作りて居るのは全く宗派の囚れ人となり其宗  
 派に束縛せられて居るからであります、我門下は現に  
 八派九派に分れて居りますが、之れが各口傳がある、  
 秘傳があると唱へて、自分の門派より外には宗祖の本  
 懐は傳はつて居らぬ杯唱へて居る、最も甚だしきは富  
 士門派の如き唯授一人の秘法と稱して其門派に居つて  
 さへも富士の眞主にならねば分らぬものがあると云ふ  
 富士の眞主様一人しか成佛も出來なさそうに思はれる  
 八品門流にも何か三千帖とかの大法門を書いたものが  
 あると云ふことであるが、末派の僧侶も見たことがな

い、況んや俗信は勿論のこと、たゞあると云ふこととて  
 す位の處で、えらそうに云ふて居る、其他にもいろ／＼  
 勝手な熱を吹いて居る様であるが、こう云ふ考へから  
 何事を研究してを決して正しき道に入ることは出來ん  
 のである、我宗旨には他には無い口傳秘傳があると云  
 ふ色眼鏡を掛けて、萬事を判断するから、其色眼鏡の  
 色にしか寫らぬ譯であります、こう云ふ思想は近代の  
 人々計りてはなく、既に宗祖滅後一百年即ち我開祖日  
 什正師の出興の當時に於て最も盛んであつたので、我  
 開祖が天台宗の碩學として羽黒山に教徒を統ふるの時  
 宗室の開言抄如説修行抄の兩抄を披見するの機會を得  
 て、連祖の教義の時機に適するを見、六十余才の老齡  
 に係はらず、斷然過時去曆の天台宗を棄て、中山  
 に延山、連祖の教義を求められました、當時諸山の  
 状態は互に相傳を争ふのみにして、連祖の教義の眞髓  
 を得る能はざるものあるに依り、諸山を訪ふの徒勞な  
 るを知りて、直に宗祖の遺書に基いて其教義を知るの  
 止むなきに至り、茲に經卷相承の宗旨を再興せらるゝ  
 に至りましたのは明に其實實を證明して居ります、昔  
 掛けたる色眼鏡が今日に至るまではづされないのは眞  
 に慨はしき次第であります、本宗は幸に開祖が右様の

次第開宗せられましたから、經卷相承の宗派を維持し  
 て今日に至り、最初から其色眼鏡は掛けて居りません  
 故、最も公平なる見地に住し、教義の研鑽を積まれ  
 したから現今の他派に比して、所謂僻が一番少ないと  
 云ふて宜敷いのであります、然し中古に於ては網對に  
 其僻がなかつたとも云はれませんが、根本が經卷相承  
 と定まつて居りますから、縱令先師に其僻がありしと  
 しても是非其れに服從せねばならぬ事はない、經卷と  
 合すれば用ゐ、合せざれば用ゐない迄の事である、凡  
 て取捨の標準を本經本論に取る故、途中に生じた異見  
 は何時でも根本に於て統一せらるゝ結果になるのであ  
 る、處が他の方面の流義は本經本論を圍いて未釋から  
 未釋と傳つて行く故、益々分裂的に數多の見解を生じ  
 のであります、箇様な次第故我々は宗學研究上に就て  
 は一宗一派と云ふ觀念を取り去つて、一釋迦宗、一佛  
 立宗の何者なりやと云ふ事を研究しつゝあるのである  
 と云ふ考で居らねばならぬのであります、次に

(二)宗學と普通學との關係

に就いて述べます、今日の諸君が中學校や其れ以上の  
 高等の學校へ入學して普通學を學んで居らるゝ事に就



て、心得て置かねばならぬ點を、漸し致して置きます、現今に於ても舊き思想の人は僧侶と云ふ者は佛の教へへ研究すれば、世間の學問は不必要と云ふことを申しますか、之は考違てあろうと思ひます、我々が普通學を研究するのは其れに依て衣食の途を求むるのでもなく、物知りに成る爲めでもなく、其時代の人の思想と智識にに適したる教化を施す必要に依るものである、一体我々の信ずる法華經は、釋迦如來の極説で千古不變の大眞理を御説き遊ばしたるものである事は、今更喋々語るまでもなきことなるが、茲に注意せねばならぬ事は、教理が千古不變の眞理であらうとも之を説明し之を了解せしめるのには、其時代の智識、思想の變遷に依りて變化が無ければならぬ、則ち説明の形式は時代の思潮に應じて變化せねばならぬのであります、又眞理を説明する計りてはなく、譬諭を設けるにしても、其時の人々が直に了解の出來得るものでなければ譬諭を設けた機能が無い、其時代に適當したる譬諭は如何なるものなりやと云ふ事を知るには、時代の學問が必要なるのであります、我々の信ずる本佛本法は最も完全なる最も圓滿なる佛であり教であるが、之を如何様に説明したならば、其圓滿完全なる佛と法とを

幾分にもよく多く圓滿に、より多く完全に説明し得るかかと焦慮するのが我々弘教者の任務であります、先師先輩も其當時の思想に應じて適當なる説明形式を取られましたので、之れが直に其儘今日の人々を信服せしめ首肯せしめ得るかかと云ふとそうはいかぬ點もありません、一寸例を引いて見ますれば、宗祖が安國論に天變地天の事に就いて述べられてありますが、あの方法は未だ科學の發達せざる時代、地震は餘が尾を掉ふも雷は雷神が大鼓を打つものかと考へられた時代に於ては差支へありませんが、明治の今日は成程と感服するものは一人もあるまいと思ひます、亦釋尊當時の須彌説の如きも矢張今日の科學上では感服できないてありませう、そうすれば此等は今日の科學上の智識に應ずる樣説明の形式は變化するの必要があるのであります、斯様に申しますると又舊思想家は三世了達の釋尊、上行再誕の蓮祖にそんな間違は無い、寧ろ今日の科學の方が間違つて居る杯と申す人もありますが、此は又釋尊の當時蓮祖の當時の社會の思想を知らんからであります、釋尊の須彌説と云いまするも、蓮祖の天變地天の説も皆其當時の一般がそう信じて居つたら、それを其儘利用せられたに過ぎないので、釋尊出世の目的、

蓮祖出興の目的はそんな事柄の實否を糺す爲めでない他に大目的があるので、こう云ふ事はどうても世間の人の考へに任せて置いて差支へないから、其思想に順ふて行かれたものである、若しも釋尊や蓮祖が今日の科學的の實際を知つて居られても今日の科學の樣な説明を爲したならば其時代の世人は信ずる處ではない狂人であると云ふ位の事で、却つて其人の言ふ事を信せず大目的を達する事は出來ない故に大目的の本佛本法を弘布する事に障害なき限りは其時代の思想に順ふて行かれたので有ます、之れ故に今日は今日の思想に適當する様に説明方式を換へて行かねばなりません、之れ故今日の者が昔の説明を間違つて居ると云ふて全然排斥するのも誤であるし、又昔の説明方法に拘泥して新思想より嘲哂せらるゝのも愚の至りと申さねばなりません、宗祖は弘教の方法に就いては、教、機、時、國、序の五段に亘つて其前後關係を詠く調へて弘教せよと申されてあり、天台大師は四悉檀とて、世界、爲人、對治、第一義の四方面より見て弘教すべき様を示されてありまして、其時代に適當なる教化を布くべき事は先哲の御示教遊ばされた處で有ます、今日の吾々が世間の普通學や哲學杯を學ぶのは、一面には時代思

想の何物なるやを知り、一面には此思想に適當なる説明形式は如何様になさねばならぬかと云ふ事を研究する爲めに學ぶのであります、嘗つて普通學を學びし二三の薄志弱行の輩が墮落して俗人に爲つたことがあると云ふこともありました、此れは學問したのが間違つて居るのでは無くて、其品物が腐つて居たのである、こんな品物は普通學をやらんでも墮落するのである、今日の學生達にはこんな物は無いと信ずる、兎に角今日我々の普通學を學ぶのは、我信する本佛本法を世に弘めんが爲めに、時代に適當なる教化を施すべき其準備の一端であると云ふ事は忘れてはならぬ事である、元より本佛の境界は言辭相寂滅と云ひ唯佛與佛乃能究盡と申されてある位であるから、到底吾人の凡慮を以て彼此云ふた處で、圓滿に説き明す事は出來ないのであつて、唯ヨリ多くヨリ近くヨリ明らかに説明したい一人たりともより多く本佛に信を捧げしめると云ふのが吾人の本務であるから、其本務を成就する様盡力せねばならぬのであります、又我々が取る説明の方式昔の説明の方式に異りたりとて之れて本佛が何う變化すると云ふ事はない、本佛釋迦牟尼世尊は五百塵點劫來常住此娑婆世界常在靈鷲山で如何様に説明せられた



からとて、本佛の身の上には何等の増減あるべきではないのであります、故に説明の方式はより多く人を化導し得る方法を取るのが最大必要でありませぬ、之れで略ぼ宗學と普通學との關係は御分りの事と思ひます、が終りに臨んで殊に注意を致して置きたいのは、前に述べた様に申しませすと何んでもかんでも昔の思想は舊い新思想でなければならぬとて、ハイカラがつて昔は一も二もなく排斥すると云ふ突飛な考へを起してはならぬ、繼令古人の言われた事に致しても一から十まで悪い事はない、成程科學や醫學杯の物質的方面は當世が進化致して居るけれ共、精神界の方面は寧ろ今日は墮落して居る文學にせよ哲學にもせよ、古代の大理想は到底近代の學者の模倣し得ざる處でありませう、して見れば慎重なる考慮を費やさずしては是非の判断は出来ませぬ、依つて將來諸君が新式の説明方式を考案するに致しても、再三再四熟慮して前後左右を顧み、充分其過失なきを認めたとせなければ、容易く發表はせぬと云ふ事にせねばならませぬ、近代の人にはどうも此點が欠けて居つて、輕卒に先師を非難する様な傾がある様に思われませぬ故、特に注意して置きます、(完)

### 寄統一記者足下

影山謙二

貴誌一月號備さに拜見致候、又手這回社會方面に於て有力なる道俗異韓同心の諸士、祖道廣宜の爲めに「天晴會」を組織せられ、帝國首都の眞只中に於て一大獅子吼を擧げられ候こと、誠に近來壯絶の快事に有之候。今にして追想すれば六百五十有餘年の前、聖祖在世當年の日本國民は、社會の上下を通して、かの消へ入るか如き、絶へ盡さるか如き念佛唱名の「哀音」に魅せられてありし。於是乎、我聖祖は時代救済の清涼劍として「聲も各々ぞ南無妙法蓮華經」の愉快なる教義を國民の間に宣傳せられ、而して遂に「我は日本の大船也、柱也、眼目也」と本覺の大慈悲心を以て國民の安全を保障せられ候。

竊て明治現代の今日を觀るに、何物乎、世道人心中に於ける最爲第一の欠陥なる。予は信す「意思の薄弱」なること「意思鞏固ならざる」こと、是れ實に當代國民の各階級を通して等しく病める時代の病根と存候。政治に見よ、教育に見よ、文藝に見よ、軍事に見よ、實業に見よ、舉世滔々、薄志弱行これ耳。若し夫れ主義、

定見、信念、是等苟も善字面を以て藉ふに足るもの果して指を屈して數ふるに値するもあり邪。於是時、根氣滿天、精力旺盛、霸氣縱溢、所謂「法華經色讀」の聖祖を社會に紹介して、其偉大なる聖徳を内外國民の全体に光被して一世を化導すべく誕生したる「天晴會」に對しては坐ろに感喜多大の謝意を表せずんばあるべからずと存候。尙くは前途益々健在自重なれと祈るものに御座候。

### ◎天晴會臨時會の光景

田中智學居士の懇篤なる招きに依り、天晴會臨時會は、二月廿七日相州鎌倉安山師子王文庫に觀梅を兼ねて開かれ、會員等は朝來東京方面より新橋發隨時の列車にて三々伍々同地に馳せ集り、文庫在留の安國會員數名は、流車の着する毎に、紫染抜きの安國會布教旗を打振りの、鄭重に停車場に出迎ひ、夫れより田中智學氏及同門生一同先導にて、文庫の庭園を案内せり、同庭園は例の疑り性の田中氏が、扇ヶ谷と稱する丘閣逶迤たる天然の景勝をば、十數年來意匠を凝らして切り開きたることゝて、徒らに奇巧を弄したる俗庭園の比

に非ずして、幽邃の間に教訓を寓し閑雅の裡に崇高の氣を含み眞に別乾坤の趣きあり、丘腹に羊腸曲折せる逕路の左右には今を盛りと一時に咲き競ひる數十百株の梅花は悉く馥郁たる芳香を放ちて之を迎ひ、歩一步香雲に駕し芳霧に浴しつゝ、身は是れ羽化登仙の心地にて迎り行く中に、仙寰中の一里塚とも思はるゝ小碑石は點々として更處々々に散在して、碑面には養正心氣(神武帝)、億兆一心(今上帝)、憶病にては叶ふ可らず(日蓮上人)、臨終の事を習ふて他事を習ふべし(全)等の警句を刻して時々驚きと誠めとを與へぬ、やがて丘庭の半腹湘心臺に至れば風雅なる東屋の設けあり各々茲にて茶菓の接待と共に庭園の風景を撮影せる繪葉書の寄贈ありて、臨時のポストまで傍に設けられありければ、各々感興を書き記しつゝ、文庫の紀念スタンプを捺して投函し、斯くて小憩の後更に勇を鼓して幾條の迂路を曲折すれば、庭内第一の高處たる春待臺と云ふに達し、茲にて更に茶を喫しつゝ、眸を放てば先きに觸向迎接し來れる蒲庭の梅花は悉く脚下に群芳芬一時に襲ひ來り、近くは江の島鎌倉の景勝、房山相海指願の間にあり、一瞻一步大に景色ありし會員等も、茲に至り三百由旬を過ぎ四百由旬を超へ、始めて五百



由旬の寶處に達して法界寂光の境を目前に開くの思ひあり、覺えず衆一齊に快哉を絶叫せり、暫時にして式場の方に降り行き此處、前底にて國府厚東氏の將ゐたる毎日電報の寫真隊に依りて一同紀念の撮影を爲し、それより式場の廣間に入れば、田中氏が多年苦心の下に蒐集せる日蓮上人靈蹟寫真數百枚其の他曉亭畫伯の御一代畫書に田中氏の説明書を附したるもの直齋畫伯の宗門史蹟畫など處敷さまて一面に陳列せられ會員一同無限の興味を恣にせる中に、時辰定刻三時を報するや左の順序にて講演は開始せられぬ、

第一席 田中智學師

ツマラヌ觀梅を兼ねて自分が申出たる希望に對して斯くも多數の會員諸君が茲に臨時會として清淨の會合を催し下されしは最も自分の光榮として感ずる所なり近來世人が日蓮上人に對する態度は一變せり自分三十年来世の覺醒を促すべく絶叫を續け居るも未だ多く徹底せず然るに機運の熟する所か此の數年來は先きに高山君が上人鼓吹の聲を擧げ其後京都醫學校次には早稻田大學等に研究會起り今や天下に上人渴仰の徒漸々多からんとす先頃も別府温泉滞在中某劇場に講演を開さしに聽者中海南新聞主筆某の如

の海苔の中、前者は佛法を表す可くは後者は王法を表す可し、況やノヲは法なり海苔は戒體と其音相通するをや、佛法王法冥一し四海歸妙し本門の戒體成就して萬民一同に妙法を唱ふるが如き時季を造るは諸君の責任也此の海苔により此間の眞風を味ふもの諸君を指して雖や予は最後に拙吟三首を諸君に呈せん曰く

鎌倉懷古

念爾祖師寤寐欽

松風肅颯瀟瀟

斐山觀梅

滿山無樹不梅花

占斷春光誰是主

其二

暗香浮動影縱橫

這裡風光春不俗

第三席 守本文靜僧正

予の日蓮上人を渴仰する也日宗の僧なるが故にも非ず日本人たるが故にも非ず、唯一種の血液が何となく上人に向て送るのみ予は上人の人格は容易に研究し盡されずと思ふ、然も何故に信するかと云へば嬰

鎌倉遺跡或殊深  
猶作當年獅吼音

豚々香風取次加  
巴雷處士讀書家

付與黃鸞弄曉晴  
法華人間法華聲

きを中心として上人研究會を起すに至る、見よ幾多の天晴會は天下に簇起せんとしつゝあるに非ずや今や社會に樞要の地歩を占むる人々の専心注目する所となり我天晴會の興起を見るは實に僅に一宗の祖としてなく天下の大導師として上人が天下社會に顯はさるゝの魁とも見るべし此意味にて滿幅の誠意を以て賛同し本會の前途に大に嚆矢す、予も亦一面には宗團的てなく國民的に上人を研究するの機關を造らんとすの計畫中なり願くは諸君を共に天晴地明の聖語を實現せん云云

第二席 協田堯惺僧正

諸君子が茲に持參せる二帖の海苔は諸君より外に眞に味ふ人なしと思ふ斯は昨日某知己より贈り來り一は聖祖流罪の靈蹟たる伊豆の剝岩の邊にて採取せしもの以て六百年前聖祖艱苦の昔を忍ぶ可く、一は同地附近の御止め濱の産陸下に献上の種類にして普通人の得易からざるものなりと、昔は聖祖檀越より供養せる海苔を見て『小湊ノ磯ノホトリニテ昔見シアマノリ也色形チモ替ラサルカナト我父母ノカワラセ給ヒケンナド、カンチガヒナル事思ヒ出デ云云』の追懷あり吾人亦多少の思出無る可らず若し夫れ二帖

兒が母の恩を理解せざるも自ら乳房を求めて止まざるが如きのみ、日蓮上人や本化の應生、迹化の彌勒すら猶ほ乃不識一人の歎あり實に本地高遠の人格容易に端睨すべからず、而も久遠本佛の冥々の加被力と吾人の深大堅固なる信力は以て上人を幾分たりとも見奉り得可しと信ず、天晴會は至誠敬虔の信念態度に依て上人の人格及主義を讃仰し以て本化の大光明に俗せんと欲するもの予は其の興起に對して歡喜充溢言ふ能はず謹んで諸君の奮勵と本會前途の大發展とを望む云云

是れより餘興に移り筑前琵琶「小松原」、常盤津「星下」及び「松守」の彈奏あり、其の聲調、哀婉清悽、そごろに聖祖當年に於ける千艱萬難の跡を偲び覺えず襟袖を濡ぼさしむるものあり、時に暮色蒼然として四顧漸く暗く、忽ち會員の面目を新にすべく庭園の一角に日蓮上人遺蹟の幻燈は映寫せられ田中氏起つて一々説明の勞を取りぬ、やがて午後七時晚餐の饗宴あり「とろろ汁」「かなめ汁」など斐山一流の珍味芳饈に各々舌鼓を鳴らしつゝ清談快談四筵に湧き、宴闌にして高島平三郎氏起つて會員一同を代表し

先きに數番の餘興にて吾等一同の心神に無限の感興



を興へ今また清餐珍味を以て款待至らざるなし色心  
 共に充分の滋味に飽く吾等の満足何ものか之に如か  
 ん謹んで會員一同を代表して謝辭を述べ云々  
 との挨拶を爲し和氣洋々の間に散會を告げたるは夜九  
 時なりき、同四十分宛宛たる長蛇は暗を蹴て鎌倉驛よ  
 り會員一同を都門の方に運び去りぬ、  
 因に同日參集の重なる會員は、稻田海素、今成僧正、  
 本多大僧正、細野少佐、富田日大教授、大貫忠次郎、  
 協田僧正、加藤僧都、風間日大教授、吉田辨護士、  
 吉田中佐、高島女子大講師、山根僧正、山田一英、  
 國守犀東、境野黃洋、笹川僧都、柴田日大教授、關  
 田顯大教授、山村勲業協會理事、守本僧正等約三十  
 名なりき

### 尙風會發會式の實況

風紀改善を目的とし岩佐春治、本多日生、千葉彌治馬、  
 山本八三郎、篠原藏司、日野厚信氏等の發起により組織  
 されたる千葉縣尙風會は本月十四日山武郡東金町八鶴  
 湖畔なる西福寺に於て其の發會式を舉行せられたり、

の處世の上に必要なる劍術を學はしむる所以なりと説  
 き更に園藝、鶏豚、其他に付青年に生活的實務的實地  
 演習を爲さむべしと一ノ宮に於ける青年會の實例を  
 舉げ聲んに子爵一流の主義を鼓吹すると一時間有餘次  
 に國府種徳氏は『民政調査の一節』と題し歐洲白耳義に  
 於ける組合の實例を引きて論じ、四時五分餘典の白晝  
 幻燈を行ひ田中事務官説明し次で引續き姉崎文學博士  
 の『風習と自信』と題する講演あり、博士は自分の祖先  
 は風の神なりしと説き起し併し自分普通の風でなく他  
 の風を吹かし見たしと思ふと夫より良風を社會に起す  
 の必要に説き及び自分の『嘲風』てふ文號の解釋より尙  
 風は固より結構のとあれども只風を尙むばかりにては  
 不可なり進んで良風を作るの覺悟なかるべからず其の  
 良風は自信に基づけるものならざるべからず而して自  
 ら信すると共に人をも尙む人をも信じ自信力の一致な  
 かるべからずとて老西郷と勝海舟との會見、釋迦及び  
 日蓮の宗教宣傳の事例等を惹き尙風は千葉縣のみに限  
 るべからずと論結せり、次に有吉知事、登壇したるも  
 時既に薄暮講演の時間なきを以て極めて簡短に尙風會  
 の趣旨は戊申詔書の聖旨と相合するものなりとの意味  
 を叙し本多師は登壇に至らずして止み、是にて閉會を

當日は山武、長生、千葉、市原等の有志來會無慮一千  
 餘名と註せられ満堂立錫の餘地なく非常の盛況を呈せ  
 り午後一時三十分先づ發起人總代として岩佐春治氏拍  
 手の間に登壇し開會の趣旨を述べ本會の目的を説明し  
 本會の決して政黨若くは一派の宗教等に關係なき事を  
 宣明し次に『君が代』の唱歌あり千葉彌治馬氏恭しく教  
 育勸諭並に戊申詔書を捧讀し畢りて講演に移り第一席  
 法學士後藤文夫氏國民の共同力なる題下に徳島縣里浦  
 村に於ける村治上の美績を參考として述べ、次に子爵  
 加納久宜氏登壇子は本會の目的を發し風俗改良の急務  
 なるを論じ其の現居村なる入新井村に於て子が指導垂  
 訓の下に實踐せられつゝある風俗改良の事例を引き從  
 來の會葬に於けるの弊信用組合の利益等を述べ次に教  
 育の問題に移り教育を獨立せしむるの必要を説き夫が  
 爲めには基本財産を積立つべしとて之が方法を講説し  
 尙小學校卒業以後の青年教育の問題に及び我々の相續  
 人は我々よりも賢く我々よりも進歩せざるべからず否  
 らざれば我が帝國の進歩發達は何ぞ之れ有らん日本は  
 何時も四十二年二月十四日なるべしと痛論し青年をし  
 て平和の戰爭、生存の競争に勝利者たらしめんには事  
 業に對する有効の智識を有せしめざる可らず是が彼等

告げたり、時に午後六時夫より更に八鶴館に於て懇親  
 會あり出席者六十有餘名、岩佐氏開會の辭を述べ、席  
 上有吉知事は何故に自分が本會の擧を贊し之に臨席し  
 たる乎と云ふに就て一場の演説を試み、從來縣廳にて  
 は民間の事業に對して専ら技術上の智識を送るに努め  
 指示誘導する所ありしが今後は更に一步を進め精神上  
 の事に迄及ぼし度く考へつゝある折柄今回此の尙風會  
 の發起あり極めて美事なりと信するが故に自分も賛成  
 したる次第にて本會に向つては協力を各々さるべく縣  
 廳にては技術上に併せて精神上の發達をも促がすとい  
 力を效すべし云々と述べ宴に移りて一同歡を盡し散會  
 せり

### 雜報

○京都通信(鈴木孝碩報) 開家法要 村上貞藏氏の子  
 息忠君は染職學校卒業今回京都西陣に家を構へ業を創  
 められたるを以て本山院席及び近末僧員を招待せられ  
 野口僧正導師の許に嚴肅なる法要を勤修し導師の祝辭  
 文ありて式を終たり因に僧止の祝辭文左の如し  
 南無本門壽益本尊大慈大悲來臨臨臨、泉州堺之住人本家信徒村上貞  
 藏氏子息村上忠君本月本日を以て地を西陣にトシ家を構へ業を創む  
 嗚呼吾田度後には有大長者財富無量資糧益壽四無、子に附與す  
 是れ出世の大道にして法華の心髓也家主たるもの念、信仰に住し



敬々家業を勤め財富無量にして之を永く子孫に傳へん是れ世間の道にして亦出世の大道に契ふ宗廟聖人更に訓へて云く法の御爲にも世間の心程も善かりけりや々と云はれ玉へと此の心もて破る無んば上座下に對して忠告先父母に對して孝なり要は唯信仰あり賜以一貫爲戒詳

明治四十一年十二月一日

本智徳院日主 謹白

○村上貞藏翁還曆 本山妙満寺信徳總代として夙に護法篤信の譽高き貞藏翁は本年還曆の賀年を迎へられ舊臘一日を卜し其の祝宴會を催され來賓一同へ寫眞一葉を呈し十二分の馳走ありて頗る盛會なりき、同氏は全く世間的の一段落を告げ出世間を第一に置き今後の活躍を標示せる事等に眞に聖祖末流の信徒の態度なりかくありたき者に候、品川より本多狹下の戀篤なる賀狀あり野老師並に來賓より祝の句を得たれば左に掲載す

自 詠

村上貞藏

ありかたや十とせ餘里を行ほして

照るもみちちりてもえたは十文字

一とさまりつけてしはしは冬籠り

かふふゑて満庭にほふ水仙花

すこやかによはひ重ぬる君なれば

色かへぬ松に千年の齡かな

野 口 日 主

野 老 乾 爲

墨 照 玄

鈴 木 孝 碩

白 水

○國光婦人會例會 一月十三日は例年の通婦人會の初寄にて午後一時より法要並に説教終て天齋一刀(墨氏)の佛教新講談あり續て川崎氏山形姉妹の唱歌劇福引等方丈より茶菓の饗應ありて當日は雨天なりしも參詣者多數薄暮散會せり

○本山例會 一月十八日午後七時開く

法華經主義トハ何ゾヤ

よしあしき

兩種の釋尊

統一の信仰

縁起論

開會の詩

本尊の光明

宗教的生活に就て

一月廿五日高辻久遠寺例會

根本的信仰に就て

佛教徒の本領

○日宗各派聯合懇親會 日宗各派聯合の上は將來の活動をはかる爲め一月廿日川東妙傳寺に於て大懇親會を開催せられたれば來會者五十名餘にして懇て時針の二時を報ずるや爰て掲出せし如く宗歌、幹事、挨拶、公名紹介、紀念攝影祝辭演説晚餐餘興散會の式次に依て野口僧正本能寺執事桃井了音二師の有益なる祝詞演説あり幹事の餘興五人走場的三人上戸劍舞琴合奏音器福引等ありて一同十二分の歡を盡し將來の發展方法を語りつゝ和氣洋洋たる中に散會せるは午後八時頗る盛

能仁事一師

松崎事成師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

能仁事一師

會なりき、當日聖祖門下同志會なる者を組織し毎月一回第一日曜日會員相集りて祖書研究を成す事に決定せり

○園遊會 三條衣棚秋山覺次郎氏は今回別荘を新設せられたるを以て野口僧正並に院席諸師を招き午前はその祈禱法要を修し午後は園遊會を催されたり今其の概況を記さんに當日は一天拭ふが如く晴れ渡りて木の芽も春の來れるが如く思はるゝばかり、げに好天氣にて何となく、よき必地せられぬ。さて會場入口より庭園には紅白の國旗天空に舞ひ、甘酒店、壽し店、團子屋店、そば屋店、繪葉書店、田樂屋店、ゲルマ店等は各々意匠を凝らして裝飾を施されたり特にゲルマ店は趣味あり各店中秀逸なり此の盛なる催しを而も獨立して趣向を凝らし午前は法要を營み午後園遊會等の順序は眞に廿世紀的なり、斯くあらまほし、因に同家には例月十五日夜野口僧正法話ありて正義の信仰も堅く商店も先代の頃より一層繁榮の由賀すべき事に候

○岡山教信 ○日蓮研究會 一月十九日例會を市内山下弘通所に開く會衆五十餘名能仁上人の聖語錄道義章講義あり終に「宗教は未來に偏せるものと現世に偏せるものと何れか宗教として可なるや」の論題に付討論一時半に亘り結局現世派多數にて勝利を占めたり

○篤信會 篤信會主催に係る佛教演説會は一月二十七日内山下弘通所に開催聽衆百餘名辨士及演題左の如し

信仰の眞實

松崎事成師

國民圖書の借附

○佛教演説會 一月二十八日御津郡首村藤田藤七郎宅に於て演説會開催辨士及演題左の如し

三大秘法

本尊論

因に當地及同郡上伊福地方は單稱日蓮宗妙林寺の檀徒多く而も現時日蓮宗の腐敗墮落を慨歎し改革を熱望し居れるもの多く法益も隨て多大なり會員藤田氏の如きも終に二月六日日本宗に改宗歸依し其の式を挙げたり正法の爲め歡喜極りなし

二月一日 御津郡上伊福村磯島源吉宅に於て演説會開催聽衆六十餘名多くは單稱日蓮宗及不受不施派の信徒なりし演題及び辨士左の如し

開會之詩

眞實之祈禱

信仰之敬重

當地も改革の聲高く改革派主催となり本宗の教義を聽かん爲め特に兩上人を聘したるなり

同月三日 御津郡白石村平松鹿次宅に於て開會聽衆滿堂同地方に於ては希有の盛會なりし演題及び辨士左の如し

信仰の徳

宗門革命の機運

同月四日 御津郡馬屋下村大字大久保に於て開會是れ又非常の盛會にして信徒よりも却て他宗の聽衆多かりし辨士及演題は

野老乾爲師

能仁事一師

能仁事一師



本佛の慈悲力  
日蓮上人の傳教  
法華行者の位

能仁事一師  
山名木信師  
原田容廣師

○地明會 當地第六高等學校學生數名主腦となり地明會を組織し(東京の天晴會に因みて)毎木曜日能仁上人を聘して講義を聴聞せんと企て第一回を本月七日山崎町本行寺に開き上人の種々御振舞鈔の講義あり聽衆三十餘名將來有望の會合なりし

○改宗者續出 能仁上人の布教者々功を奏し改宗し續出本年に入りて五十日ならざるに七戸の新歸依者を得しは法悦の至りなり

○日蓮宗研究會 六日日蓮宗研究會を内山下弘通所に於て開く會衆六十餘名非常の盛會にして能仁講師の聖語錄推理章講義並に『智的信仰と情的信仰の可否』に就き討議し其決を採るに至らず宿題として午後十一時閉會せり(池上化城報)

○顯本宗東京寺院諸師の特志 大學林生徒の服制を一定するため、今回佛子愛護の志誠を捧げて生徒一同へ法服を寄贈せられたるは、洵に近來の美事なり、供養於法師の金言は、正法護持宣傳の資糧なれば、純信の人は平生この心掛なかるべからずと思ふ、

○西部講習會 は本月廿七月より廣島市新川場町本照寺に於て壹週間開催せられ、講師には本多大僧正野口僧正國友文學士出演せられ、幹事大橋日豐師は、準備に孜々として、盡力せられ居ればその功果も、定めて

豫期以上ならん、篤信の士奮ふて聽講せられんことを切に望む、

○幻燈應用道義教育講話會 は二月十四日品川町妙蓮寺に於て、笹川師主催の下に今成關田山田の三師専ら説明の任に當られ、聽衆何れも得る所ありとて満足せり、日刊城南新聞に左の如く掲載せられたり、あり、道義教育講話會 顯本法華經宗の昨今の活動は甚だ目覺まさものなるが全宗にては十四日午後六時より南品川町南馬場妙蓮寺に於て幻燈を應用し道義上の教育講話會を開催せるが頗る盛會なりし

○華名日幸師の遷化 名古屋市常徳寺住職僧都華名日幸師は、本月七日突然發病せられ爾來療養怠りなかりしが藥石終に其の功を奏せず本月十五日午前十二時四十分溘然として遷化せられぬ、越て十八日日本葬の式典を其の住職地たる常徳寺に舉げられしが會するもの親戚故舊を始め市内日宗寺院五十餘ヶ寺、組寺妙行寺武藤顯誠師並に常徳寺檀家總代富木庄兵衛小澤正直平野其九郎、法中の會葬者としては十三教區管事岡本國正、長谷川日濟、武藤照惠、栗田日滿、水谷大雲の諸師、東京よりは管長代理として野口日主僧正特に臨席せられ遺弟としては原田容廣佐々木英春、法兄弟としては華名玄饒等の諸師にして其の地檀信徒として會するもの三百余名、壯大なる葬儀は同師生前の黨徳の歎す所と其の性行を偲べられたり、當日管長親下の哀悼文岡本師の歎徳文鈴木獻庵氏の唱

詞を得たれども紙面の都合に依り省略す

### 會津妙法寺本堂再建寄附金 申込報告 (第一回)

金五拾圓	第一教區妙國寺代表	本多	日生
金四拾圓	本光寺住職	今成	乾隨
金五圓	清光院住職	伊保内	教精
金貳拾六圓	妙蓮寺住職	笹川	眞應
金拾八圓	本榮寺住職	吉田	日宣
金參拾圓	圓常寺住職	鈴木	日雄
金貳拾四圓	安盛寺	藤崎	通明
金四拾圓	常福寺住職	金阪	義昌
金拾貳圓	慶印寺住職	山根	日東
金拾圓	寬受院住職	田島	義潤
金貳拾八圓	壽仙院住職	川崎	泰秀
金參拾參圓九拾錢	法成寺住職	關田	養叔
金拾圓	妙經寺住職	里見	日潮
金參拾參圓九拾錢	馨泰寺住職	飯倉	日和
金拾圓	蓮華寺住職	松田	宏繁
金貳拾圓	本授寺住職	笠原	琢瑞
金拾圓	顯本寺住職	山崎	日暉
金拾圓	本念寺住職	大須賀	玄遊
金四拾五圓	本教寺住職	井村	日威

金拾圓	妙顯寺住職	吉田	義着
金貳拾圓(五圓即納)	常支寺住職	鈴木	日新
金五圓	報恩寺住職	森本	眞良
金二拾圓	久成寺住職	田井	日晃
金參圓	正法寺住職	安藤	日莊
金拾八圓	善慶寺住職	石波	英哉
金參拾五圓	鎌倉郡飯田	本興	寺
金九圓	常林寺住職	山田	日廣
金參拾圓	行寺	中村	日錦
金二拾九圓	本滿寺	竹内	無着
金五圓	泉福寺住職	萩原	會雪
金貳拾圓	行光寺住職	小高	榮都
金拾貳圓	泰行寺住職	梅澤	天純
金二拾貳圓	本泰寺住職	吉田	純賢
金貳拾圓	壽福寺住職	今井	日省
金貳圓	本妙寺住職	朝倉	弘元
金二拾六圓五拾錢	泰安寺住職	井口	善叔
金四圓八拾錢	寶藏寺住職	鈴木	日王
金參拾圓	妙經寺住職	山本	日悟
金九圓二拾錢	長遠寺住職	鈴木	純智
金八圓	行傳寺住職	加藤	會圓
金八圓	本永寺住職	水原	麟叔
金拾二圓	感應寺住職	高橋	應山
金二拾四圓	成就寺住職	飛山	日甫
金六圓六拾錢	長秀寺住職	佐野	泰晋







# 統一

第七百號

四三三二七  
仙台了